

## 小学校におけるカイコの飼育を通じた教育実践

伊東, 俊昭  
佐伯市立明治小学校

<https://doi.org/10.15017/6796410>

---

出版情報 : 生活体験学習研究. 22, pp.29-38, 2022-07-30. The Japanese Society of Life Needs  
Experience Learning

バージョン :

権利関係 :

# 小学校におけるカイコの飼育を通じた教育実践

伊 東 俊 昭\*

## Educational Practice Through Growing Silkworms in Elementary School

Ito Toshiaki\*

**要旨** 小学校におけるカイコの飼育を柱とした取組を通して、児童の具体的な学びの様子や取組の成果と課題を紹介する。また、この取組が、教師にとって教科融合的な学習の在り方について学ぶ機会となり、授業改善に繋がったことについて報告するものとする。とりわけ、新型コロナウイルス感染症対策により、学校における体験活動や各種行事などが制限される中、児童が、その影響をあまり受けることなく取り組むことができた体験学習として、新型コロナウイルス感染症が広がる前の令和元年から令和3年度にいたる3年間の取組について紹介する。

**キーワード** 地域協育コーディネーター、カイコ、仕組む、教科融合型授業

### 1. はじめに

本校は、令和元年当時、各学年単学級と特別支援学級の7学級（令和3年度8学級）で、児童数は、173人（令和3年度181人）の小規模校である。

私は、令和元年度から本校の校長として勤務しており、学校の教育目標は、「ふるさとを愛し、豊かな心と学ぶ意欲を持ち、自ら『気づき・考え・行動できる』たくましい子どもの育成」とし、本校の教育方針の中で、地地域のひと・もの・ことを生かした体験活動や課題解決学習の推進に重点を置くことを示し、学校経営を行ってきた。

令和元年当時、7人の担任の内4人が20代ということで、経験年数の少ない教師に対して様々な体験活動や地域素材を取り入れた授業を行うことを通じて、児童にとって楽しく、分かる授業の創造に繋げて欲しいと考え、草花や野菜の栽培、校庭に実った果実を使ったシロップづくりなど様々な活動を仕組むことを提案してきた。

その中でも、特に、教育効果が認められ、教師の学びにも繋がったカイコの飼育に関わる実践について紹介することとする。

### 2. 児童の実態及び課題

令和元年当時、全体的に素直で好奇心旺盛な児童が多いが、自己肯定感が低く、主体的に取り組もうとする児童は少なく、自分の思いや考えを表現することが苦手な児童が多く見られた。課題としては、継続的に粘り強く取り組もうとする力を育成することが挙げられた。

### 3. 取組の実際

#### (1) 素材の準備

前任校で、カイコの飼育を行うことで教育効果が高まることを実感していたので、赴任してすぐに現任校でも同じ取組を行えないかと考えた。学校が借りている畑の隅に桑の木が3本あることが確認でき

\*佐伯市立明治小学校  
連絡先：〒876-0101 大分県佐伯市弥生大字大坂本1135番地 E-mail: itou-toshiaki@oen.ed.jp  
TEL：0972-46-0010

なので、桑の葉を容易に手に入れることが可能であると判断し、取組を仕組もうと考えた。そこで、地域協育コーディネーターにカイコの卵を手に入れてもらうよう依頼した。

## (2) 取組の導入として

教員として2年目の3学年担任には、子どもたちが、目的意識を持ち全員で協力し合いながら取り組む活動を仕組むことで学級経営を効果的に行うとともに、理科の学習を補完する教材及び総合的な学習の時間の学習の取組として勧めた。

初任者である4学年担任には、特別活動の取組としてカイコの飼育を勧めた。

## (3) カイコの飼育に関する指導・助言

令和元年には、まず、カイコの卵を校長室で担任2人に紹介した。前任校での取組の様子とその成果について説明をした上で、興味があったら飼育をしてみないかと話を持ちかけた。3学年担任は、卵から孵った幼虫を見て「無理！無理！校長先生、私は、虫が苦手なんです。」ということだった。



幼虫を初めて見た3学年担任



幼虫を初めて見た3学年担任

4学年担任には、初任者ということもあって、体験活動を行うことの必要性を説き、手始めとしてカイコの飼育を子どもたちに取り組ませてみないかと声かけをした。



幼虫を初めて見た3年生



畑で桑の葉を確認した3年生

3年生に、校長室に来るように声をかけ、カイコが卵から孵る様子を見せたところ、児童が声を上げながら興味深げに観察する様子を見て、担任も飼育をしてみようかという思いにいたった様子だった。

4学年担任には、3年生の様子について話をした後に、4年生にも声かけをして、子どもたちが、カイコを飼育したいという気持ちになったら、幼虫を分けてあげるといった導入の仕方、取組を始めるように仕組んだ。

早速、担任2人を学校が借りている畑に連れて行き、3本の桑の木があることを説明した。また、朝夕2回、桑の葉を幼虫に与えることを説明した。特に、毎日欠かさないようにすることと、雨の日には葉っぱの水分を拭き取って与えることを確認した。土曜日や日曜日については、私が管理することを伝えた。



校長の説明を聞く4年生



カイコを観察する3年生

休み時間を使って児童を桑の葉のある場所まで引率して、飼育の仕方について説明をした。朝の忙しい時間に担任に対応させるのは厳しいと考え、両学年とも当番を決めさせ



桑の葉を取る3・4年生

た上で、しばらくの間、私が、児童を畑まで引率した。

また、カイコが成長する様子をデジタルカメラで撮影し、そ



カイコの様子を掲示

の画像を階段横の掲示板上に掲示するとともに、学校だよりや掲示物で子どもたちの取組の様子について紹介した。

また、3学年担任には、観察日記を付けることやそのためのワークシートの活用を勧めてみた。さらに、劇化して発表することや高山辰雄賞ジュニアデザイン展の作品の画材とすることも取組の一つとして助言しておいた。さらに、卵は次年度の取組に生かすために、冷蔵庫に保管しておいた。

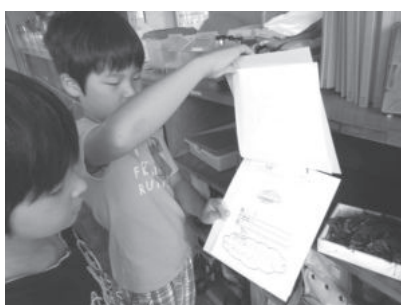
#### (4) 児童の取組の様子

3学年の児童は、当番を決めた後、張り切って桑の葉を取りに行き、カイコに新鮮な桑の葉を欠かさず与えていった。幼虫が少しずつ大きくなり、児童は、変態していく様子を観察日記に記録した。また、模造紙にまとめて発表を行った。

また、登校してすぐに校長室を訪れ、教室で飼育しているカイコの変化について報告に来る児童もいた。

途中で、1匹幼虫が死んでしまい、雨の中、全員で学級園の近くにお墓を作って、手を合わせていた。その出来事は、児童にとって命について考える機会となっていた。

児童は、カイコが繭を作り、成虫となり、交尾を行い、卵を産むまでの成長



3年生の観察日記



3年生発表の様子

の過程をしっかりと観察できていた。

高山辰雄賞ジュニア美術展の作品として、ほとんどの児童が、カイコを飼



カイコの絵を描く3年生

育している様子を画材として選び、観察したことをもとに意欲的に絵を描く姿が見られた。

秋になり、「明治小夢わく祭」でカイコの成長の様子を創作劇として発表する取組を総合的な学習の時間の学習として行った。

最後の取組として、カイコの繭から絹糸をとる活動を行った。グループに分かれ、担任がユーチューブの画像を参考にペットボトルで作った糸取り機で絹糸を少しだけ取ることができた。



カイコの劇を演じる3年生



繭から糸をとる3年生

3学期には、カイコの成長の様子について説明する紙芝居を作成し、発表する予定だったが、新型コロナウイルス感染症対策により3月から休校となり、完成した紙芝居を発表することができなかった。

#### (5) その後の取組

令和2年度も教育課程に位置づけられた取組として、3年生によって総合的な学習の時間及び理科の学習としてカイコの飼



畑で桑の葉をとる3年生



カイコを配布する3学年担任

育が取り組まれた。校長室でカイコの卵を見せて、飼育の仕方やすさについては説明をした。その後、桑の木がある場所に行き、桑の葉のと

り方などを指導し、カイコの飼育が始まった。

しかし、新型コロナウイルス感染症対策として、4月から5月中旬まで休校や分散登校の実施により、令和元年度のような取組を行うことができなかった。

そこで、担任が、プラスチックでできた弁当用の容器を準備して、幼虫を1匹ずつ入れて渡した。児童は、2日に1度の登校で桑の葉を持ち帰り、各自が家で飼育をしながら、観察するようにした。途中で、幼虫が死んでしまうこともあったが、新しい幼虫を与えて飼育を継続できるようにした。



観察して記録する3年生

5月下旬に完全登校になって、家から持ち寄ったカイコを学級で飼育していった。その時点で4分の1程の幼虫が死んでしまった。また、繭を作る前に多くの幼虫が死んでしまい。前年度に比べうまく飼育ができなかった。

飼育と観察を続けたが、思うように取り組めなかったために、前年度のような劇や紙芝居の取組には発展させることができなかった。



桑の葉を与え、観察する3年生

私が、校長室で育てたカイコは繭になり、成虫となって交尾をするところまで観察することができる状況だったので、3

学年児童をはじめ来年度学習する予定の2学年児童にも声をかけて、カイコの幼虫を見る機会を仕組んだ。

また、階段横の掲示板にカイ

コの成長の様子を掲示し、少しでも児童の興味・関心を高めるようにした。

令和3年度に入り、令和元年に4学年担任をした教諭が、3学年の担任となった。すでに、一度カイコの飼育を経験していたので、前回の経験を生かして取組を向上させようと意欲的だった。

これまでの2年間の取組をもとに編成した教育課程(右記)を柱として、総合的な学習の時間と他教科との教科融合的な学習となるように意識して活動を仕組んでいくことを確認した上で、取組を始めた。

早速、前年度冷蔵庫に保管していた卵を確認し、地域協育コーディネーターにも卵の入手を依頼した。また、3学年担任と一緒に桑の木の様子を確認しに行き、令和3年度の取組の準備を進めた。

早速、地域協育コーディネーターから卵を入手してもらい、児童に顕微鏡を使ってカイコの卵を観察させた。児童は、卵からカイコの幼虫が出てくるところを観察することで興味・関心を高めたようだった。

そのタイミングを見計らって、担任が、児童に働きかけ、カイコを飼育することとなった。また、2年前に一生懸命に飼育に取り組んだ5学年児童にも



休み時間に観察する3年生



卵を観察する3年生



顕微鏡で観察する3年生

明治小学校 総合的な学習の時間 年間指導計画【第3学年】

単元名	カイコのひみつを見つけよう			
探究課題	自然や生き物の不思議さとその素晴らしさ			
単元目標	カイコを育てる活動を通して、自然の不思議さやその素晴らしさに気づき、それらを身近な人々に発信するとともに、自分たちができること考え、自らの生活に生かすことができるようにする。			
	【小単元1 のめあて】 カイコを育てよう。(4月～7月)			
20	【課題の設定】 糸についての経験を想起する。 一糸の裏が好きな生き物があるのかな。カイコはどうやって飼うのだろう。	【情報収集】【整理・分析】 カイコの飼い方について調べる。カイコを育てる。成長記録を書く。	【まとめ・表現】 成長記録を一人ひとりまとめる。	【振り返り】 この糸はどうしたら良いのだろう。
	【小単元2 のめあて】 カイコの繭から糸を採る方法を話し合っ決めてよう。(8月～11月)			
3	【課題の設定】 この繭をどうしよう。	【情報収集】 夏休みに行った調べ学習の結果を出し合う。	【整理・分析】 自分たちでできそうなことを考える。	【まとめ・表現】 2学期の取組を作文や紙芝居等でまとめる。
	【小単元3 のめあて】 カイコのひみつを伝えよう(12月～3月)			
20	【課題の設定】 カイコの繭から糸を採ろう。	【情報収集】【整理・分析】 だれに、何を、どのように伝えるか話し合う。	【まとめ・表現】 グループごとにまとめたことを発信する。	【振り返り】 自然や生き物のひみつについてたくさん知れた。生き物って色々あるな。
	【期待する姿】(単元の振り返り) ・実際に自然を調べたり、そこに住む生き物を育てたりしたことを通して、「自然ってすごいな。生き物って不思議だな。」と実感する姿。 ・自然のひみつについて調べの中で自分たちの生活と自然の関わり気づき、自分たちができることはないか考え実践しようとする姿。			

声をかけ、少し幼虫を分け与えると飼育に取り組む流れとなった。

早速、3学年児童は、卵の様子から観察記録をつけ始めた。担任とともに桑の木のある畑へ行き、桑の葉をとってきてカイコに与える当番も決められ、本格的に取組が始まった。



畑で桑の葉をとる3年生



カイコの幼虫を観察する2年生

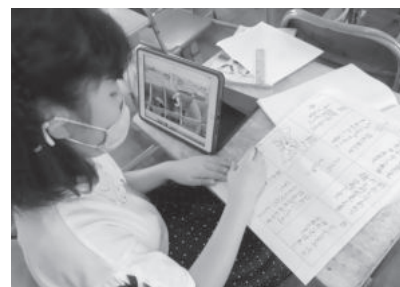
3学年児童と5学年児童は、当番を決め、毎日カイコの餌やりのために畑に桑の葉をとりに行った。なお、土曜日と日曜日については、今年度、担任が世話をするようにした。次年度を見越して、2学年児童にも声をかけ、中休みや昼休みに校長室のカイコの様子



大型モニターで観察する3年生



タブレットで動画を撮る3年生



作文の構成を考える3年生

を見せることで、次年度に向けて興味や関心を持てるように仕組んだ。

今年度は、積極的にICTを活用して、カイコの成長の様子を顕微鏡と大型モニターを接続して詳しく見せたり、1人1人に端末を使って画像や動画を撮影させたりすることで、より詳しく観察していくように取り組ませた。

さらに、3学年児童は、国語の授業とも関連



図工でカイコを描く3年生

づけながら、作文の題材としてカイコを取り上げ、観察日記の文章を詳しく書けるように指導を行ってきた。

そのことにより、多くの児童に、意欲的に作文に取り組む姿が見られた。

今年度も、3学年と5学年の児童が、図工の時間にカイコを素材とした絵を描くことに挑戦し、高山辰雄展で佳作に入選する児童も出た。

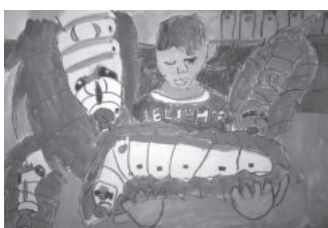
全ての児童が、意欲的に絵を描くことに意欲的に取り組み、どれも生き生きとした作品ができあがっていた。今年度もカイコの飼育活動



5年生の作品



5年生の作品



3年生の作品

と図画工作が連動した教科融合的な学習となった。

その後、大分大学の教員2人に協力いただき、「明治小夢わく祭」で影絵を行うこととなった。児童は、観察してきたことをもとに台詞を考え、道具づくりに取り



影絵の練習に取り組む3年生



影絵を披露する3年生



繭から絹糸を取る取組



放課後、校長室で絹糸を取る様子

糸をとる活動を昼休みに行った。児童は、取れた絹糸を触りながら歓声を上げていた。予定した活動は、全て実施できた。

担任は、思考ツールを使ってこれまで行ってきたカイコに関する取組について振り返りを行った。取れた絹糸を使って、



思考ツールを用いた振り返り

大分大学の教員の協力により、総合的な学習の時間として絵本をつくる取組を行うことができた。

#### 4. 児童の変容

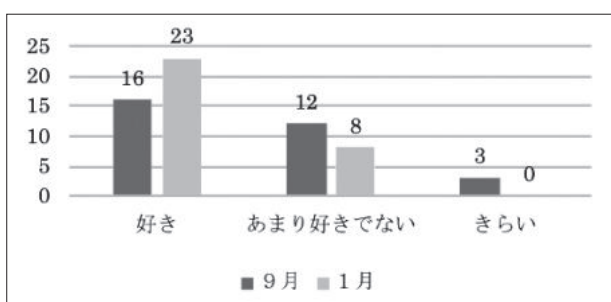
令和元年度に28人の3学年児童に聞き取り調査をしたところ、カイコを飼育する前は、虫が嫌いだった児童は19人だったが、学習を終えた後のアンケート調査では、以前より虫に興味を持つようになった児童が14人という結果が出た。「カイコの飼育をもとに、総合的な学習の時間として、劇や紙芝居に取り組んで良かった、楽しかった。」と回答した児童は26人だった。

つまり、カイコの飼育を通じて、虫に対する興味や関心が高まるとともに、自分たちの体験に基づいて、劇のシナリオを考えたり、劇で使う道具を作っ

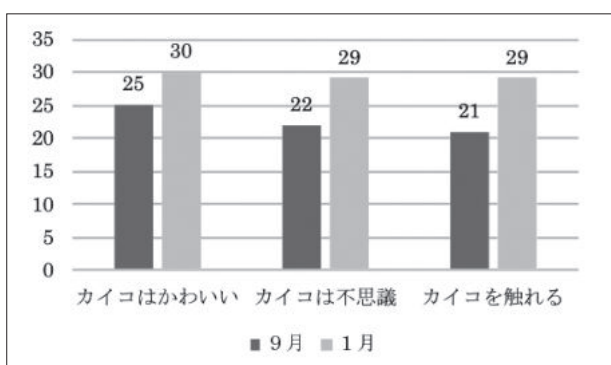
たり、紙芝居の話をみんなで創作することで、仲間と協力して意欲的に学習に取り組む姿が見られた。このことから、この取組が、児童が目的意識をもって主体的に学ぶ取組となっていたと考える。

令和元年度4月当初、3学年担任からは、「数名の男子が、諍いを起こすことが多く、なかなか協力し合うことができない」という話を聞いていたが、3学期になると「諍いも減り、仲間と協力して取り組む姿が見られるようになった。」という報告を受けた。令和2年度4月当初、4学年の担任からは、「子どもたちの学びに向かう姿勢がとてもよく、積極的に様々な活動に取り組む姿勢が見られる。」との話を聞くことができた。私が、授業観察に行っても、学びに向かう姿勢は向上していた。

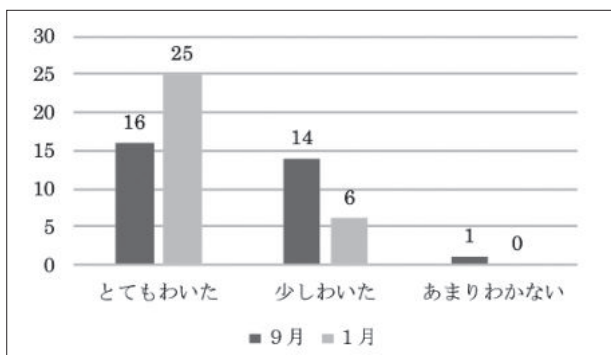
令和3年度に行った3学年児童31人を対象としたアンケート調査の結果は、以下のとおりだった。



虫が好きですか。



カイコについてどう思いますか。



虫にきょうみがわきましたか。

糸をとる活動を終えた児童に聞いてみると、「虫が好き」と答えた児童は、25人となり9月より7人増え、嫌いな児童は、0人となった。また、カイコについて尋ねた項目では、「カイコがかわいい」と答えた児童は5人増え、「ふしぎ」と回答した児童は、7人増え29人となった。さらに、カイコに触れることができるようになった児童も、29人となった。「きもちわるい」と回答した児童は、0人だった。

「カイコをお世話して虫にきょうみがとてもわいた」と答えた児童は、9人増え、「あまりわからない」と回答した児童は、0人となった。

以上のことから、カイコを飼育し、カイコを素材とした様々な教科融合的な学習を重ねていくことで、児童は、虫に触れることができるようになり、愛着を感じ、興味を持つようになることが分かった。

また、「桑の葉をとりに行くのは大変だったけど、育てるのが楽しかった。」「虫がきらいだったけど、さわれるようになりすきになりました。」「いっしょうけんめいに生きているな。」「ふしぎなところがいっぱいありました。」等の思いが書かれていた。

さらに、児童の会話の中で、「緑の葉っぱを食べるのに、どうして白い繭や透明な糸になるのだろうか?」「一つの繭の糸は、どれくらい長いのだろうか?」などの疑問が出され、より深い学びに繋がっていることが確認できた。

特に、児童がカイコを飼育し、観察を行い、カイコの成長や繭から糸をとる体験を通じて、達成感・成就感を味わわせることができたと感じている。

令和3年度の3学年は、社会科の公開授業を行ったが、その時にも、参観した他校の先生方が、子どもたちの学習に臨む姿勢が良く、生き生きと学習する姿が認められるという感想を数多くいただいた。さらに、佐伯市教育委員会の指導主事や大分県教育委員会佐伯教育事務所の方々からも同じような評価をいただいた。

## 5. 担任の変容

令和元年度、初めは虫を毛嫌いしていた3学年担任も、幼虫に触ったり、成虫を掌に乗せたりできるようになった。あれだけ嫌がっていた虫に愛着が湧き、虫に対する考え方が変わったようだった。

本人へのインタビューの中でも、「カイコを素材と





カイコ蛾を手のひらにのせる担任



令和元年度の観察の様子

して飼育し、観察するという取組にとどまらずに活動の様子について劇化したり、紙芝居を創作したり、画材とすることで年間を通じた学びとして学習活動を広げるとともに、継続的に取り組めたことがとても良かった。生徒指導上の課題を解決することにもつながり、カイコを飼育する取組を行って良かった。」と話をしてくれた。このことから、様々な素材を教材化し、それらを効果的に活用し、教科融合的な取組とすることが大切であることに気づいてくれたと感じている。

令和2年度に取り組んだ担任は、新型コロナウイルス感染症予防対策として分散登校などが行われる中、弁当などに使うプラスチック容器で1人1人がカイコを育てるように工夫した。

また、1日おきに学校に登校した際に桑の葉を畑とりに行き飼育を継続できるようにしたり、観察したりできるように対応するなどして工夫しながらカイコの飼育に取り組んでいた。

しかし、他教科との教科融合型の取組とはならなかった。それでも、児童が興味や関心を持つことの大切さを再確認できよう、令和3年度に2学年を担当し、オタマジャクシの飼育と観察に積極的に取り組んでいた。

令和3年度に取り組んだ3学年担任は、令和元年度の経験を踏まえ、飼育の仕方についての指導は上手くで



令和3年度の観察の様子

きたとのことだった。「今年度は、国語の作文や図工の絵画、理科の観察などに関連づけながら総合的な学習の時間を柱として、教科融合的な学習を行うとともに、学習してきたことをもとに影絵で発表することを通じて子どもたちの意欲や思考を大切にしながら授業を構築することの良さに気づくことができた。」と話してくれた。

また、「地域協育コーディネーターや大分大学の先生方に連携・協力していただき、より学習内容を充実させることができた。いろいろな方々に協力していただくことで自分自身の勉強になった。」と話してくれた。その後、大分大学の教員と連携して、絵本づくりを行った。

## 6. 成果と課題

初任者と2年目の教員に、カイコを素材として紹介、飼育に取り組むきっかけを与えたことで、それぞれのやり方で教材化し、取組を行うことを通じて、各学級ともその学習の成果が認められた。

令和元年度の3学年では、この取組を通じて、毎日当番がカイコの世話をを行うことで、カイコが成長し、卵を産むところまで観察し、まとめることで、気づきや思考の深まりが見られ、児童に達成感を味わわせる取組とすることができた。

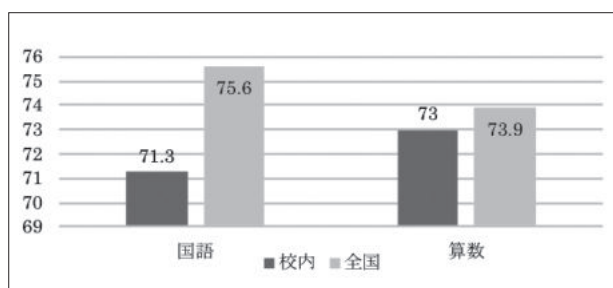
また、絵画や劇、紙芝居などの表現活動に繋げることで、学習したことを振り返ることができたこと、当番として責任をもって仕事をする姿が見られ、争いが減り、仲間と協力して取り組むことで、共有体験を通じて所属感を感じる児童が増え、仲間意識が向上し学級にまとまりができたことが大きな成果であった。

些細なことで争いが起きていた学級であったが、言い争いや仲間の嫌なことを告げ口に訪れる児童が減ったことから、生活指導上でも効果があったと考える。

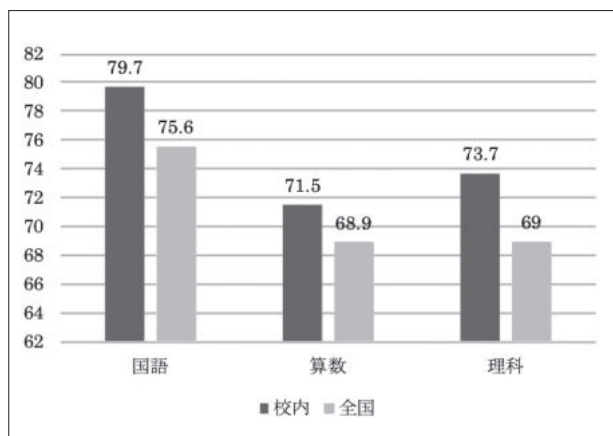
4学年児童は、3学年児童に比べると初めはきちんと世話ができていない状況が見られたが、当番になった児童が、徐々にきちんと世話をするようになっていった。一部の児童は、校長室を訪ねてきて校長室のカイコを観察したり、4学年教室のカイコの様子について報告をしてくれたり、興味関心を高めている様子が伺えた。

3学年児童に比べると、観察日記を付けたり、他の学習に関連付けた取組となっていなかったため、単にカイコを飼育する活動に留まっていた。学級全体の取組というよりも一部の熱心な子どもたちの取組となっていたのが実情だった。

特に、令和3年度の3学年の取組からは、教育課程に位置づけられた総合的な学習の時間を柱として、国語、理科、図工、道徳、特別活動など様々な教科と連動させながら、教師が意図的・計画的に活動を仕組むことで、児童が、仲間と協力して生き生きと学習に取り組み、様々な学習成果を上げることができた。



令和2年度標準学力調査2学年平均正答率 (%)



令和3年度標準学力調査3学年平均正答率 (%)

上記グラフに示したとおり、例年12月に行われる標準学力調査の結果は、今年度3学年児童が、2学年の時の国語と算数の平均正答率は、全国の平均正答率を下回っていた。令和3年度は、国語、算数、理科ともに全国平均正答率を上回る結果となった。このことから、3学年児童の学力が向上してきたことが分かる。様々な体験学習を行ってきたことで学習意欲が高まったと分析しているが、カイコの飼育活動を柱として教科融合的な学習を重ねてきた成果だと考えている。

3年間の取組を通して、どの年度の児童とも、温度差はあるもののカイコの飼育を通じた一連の体験学習により、達成感と成就感を味わうことで、少なからず自己肯定感が高まっていることは、児童の変容の様子、アンケート結果、教師の評価からも明らかである。

また、教師が、きちんとした目的意識を持ち、カリキュラムマネジメントを意識し、他教科と関連づけながら様々な学習と結びつけて飼育させていくことが、児童の主體的な取組に繋がり、より深い学びとなっていくことが確認できた。

児童が、飼育、観察、まとめ、発表などを行う過程において、自分の気づきや考え、思いなどを仲間と伝え合いながら学習することで、主體的・対話的な学びの姿が多く見られた。また、飼育することを通して、仲間と対話をしたり、協力し合ったりすることで、人との関わり合い方にも変化が起きた。

また、カイコの成長の変化に気づくと、すぐに報告に来たり、他の虫や植物について図鑑で調べたりするなど、主體的に学ぼうとする意欲的な姿を見ることができた。

一方で、カリキュラムマネジメントの視点からすると、この取組は、総合的な学習の時間としての学習を柱として、国語や理科、図工、道徳、特別活動などに関連づけられる教科融合型の教育実践としての取組とし、教育効果を上げることに繋がった。

さらに、授業改善の視点からすると、子どもたちの成長の様子を実感した担任は、飼育活動を行うことを通じて、児童が本物に触れることで、より興味や関心をもって学ぶ様子を目の当たりにしたことにより、積極的に体験活動を取り入れた授業や各種教育活動を行おうとする姿勢が見られるようになった。そのことが、授業改善に繋がっており、他の教科でも教材や教具を工夫することの必要性を実感していた。

特筆すべきは、新型コロナウイルス感染症対策を行いながらも、その影響を大きく受けることなく、この取組を継続・発展させることができることを確認できたことである。3年間を通じて、2年目は休校や分散登校をすることで難しい状況もあったが、3年目の取組では、殆ど問題なく学習内容を継続・発展できたことは、この取組の大きな成果と感じて

いる。

課題としては、飼育活動を単に体験活動に終わらせないように、他教科との融合的な取組を計画的且つ効果的に行うことが必要となる。観察や記録、まとめや発表などの活動を計画的に仕組むことにより、思考力・判断力・表現力を養うことが大切となるので、取組のねらいと内容、そして、具体的な手立てを明確にしてどのように授業を実施していくか、評価の視点とめざす児童の姿を明らかにした上で、カリキュラムマネジメントや授業構成をしっかりと行っていくことが必要となる。

また、取組を計画的・継続的なものとするためには、これらの取組の成果と課題を整理し、効果的な取組を教育課程に位置づけ、計画的・継続的に学校の特色ある取組として継続・進化させていくことが大切である。そのためには、地域協育コーディネーターと積極的に連携・協力して取り組んでいける体制の維持と地域協育推進担当などの人材育成が必要となる。

さらには、大分大学の教員と連携・協力をしていただくことでより高度な効果的な学習活動にすることができ、児童の取組の成果を科学的に分析していただけることを考えると今後も積極的に関係機関と協働していくことが必要であると感じる。

働き方改革が叫ばれている中、飼育活動を行う場合、土曜日や日曜日にも餌やりを欠かすことができない。他市から通勤している職員にとって、餌やりのためだけに休日出勤することは負担感を伴うのも事実である。

桑の葉を多めにとり、密封できるビニール袋に入

れ冷蔵庫に保管するなど、生き物を飼育する場合、餌の採取や餌の与え方の工夫など、教師の負担を軽減するための具体的な対策を講じることも今後の課題となる。

今後、職員の異動があったとしても、継続・発展してカイコの飼育が教育活動として行われていくことを願っている。そのためには、担任だけの力で完結しようとせず、職場の仲間をはじめ、地域協育コーディネーターや関係機関の方々と連携・協力しながら教育の協働を進めていくことが大切である。

教育の協働を進めるためには、「協育」ネットワークを拡充していくことが必要であり、そのためには、管理職をはじめ学校の職員が、日頃から保護者や地域住民、関係機関の職員などより多くの方々と繋がっていくことが大切であることを再確認できた。

## 謝辞

この実践に関わってきた神鳥恵美教諭、肉丸凌平教諭、三宮明香里教諭、尾崎紀美子地域協育コーディネーター、大分大学藤井康子准教授、西口宏泰准教授に心より感謝を申し上げます。

### ※高山辰雄賞ジュニア美術展

大分県出身の日本画家高山辰雄が文化勲章を受章したことを記念して、1983年から始まった県内の幼稚園から高等学校までの児童・生徒を対象として開催する絵画賞及び絵画展のこと。

### ※明治小夢わく祭

本校で平成29年度から始まった学校行事で、日頃の学習成果を保護者や地域の方々と招いて発表する機会とした取組のこと。